

「総督官邸の伝説」試論：独立革命をめぐるレトリックについて(後)

保坂, 嘉恵美

(出版者 / Publisher)

法政大学教養部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編 / 法政大学教養部紀要. 外国語学・外国文学編

(巻 / Volume)

85

(開始ページ / Start Page)

49

(終了ページ / End Page)

68

(発行年 / Year)

1993-02

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00004709>

「総督官邸の伝説」試論

——独立革命をめぐるレトリックについて（後）——

保 坂 嘉恵美

Ⅲ

第三話「エリナ嬢のマント」(“Lady Eleanore’s Mantle”)の梗概は、以下の通りである。

シュート大佐 (Colonel Shute) のもとに、植民地総督就任後まもなく、英国貴族の令嬢エリナ・ラッチクリフ (Eleanore Rochcliffe) が身を寄せることになった。その一族は既に皆この世を去り、残された彼女にとって総督夫妻だけが後見人となりうる縁者であった。はるばる船旅を終えた彼女が乗りこんだ馬車は一路ポストンへ、総督の手配した華麗ないでたちの随行者を従え、人々の注目を浴びながら進んでいく。とりわけ馬車の窓ごしに見えた彼女の姿には、なるほど貴族であるがゆえの尊大な自意識にこりかたまっているという評判どおり、誇り高い女王然とした威厳と美貌が際立っていた。そして不吉な偶然というべきか、一行が総督官邸に到着するや、向かいのオールド・サウス教会から甲いの鐘が鳴りわたり、「あたかも禍が、彼女の美しい姿を装ってやってきた」(655)⁴¹⁾と町中に告げ知らせているかのようであった。

総督が馬車から降りようとする彼女を手助けすべく官邸の玄関から姿をあらわすと、見物の群衆のなかから髪ふり乱した若者がとびだして、踏み台がわりにその身を彼女の足元に投げ出した。「いったいこの狂態はなにごとか」と彼を打ち据えようとする総督をエリナ嬢は諫め、「殿方がただ踏みつけられたいとだけお望みなら、そんなに簡単に施してさしあげられることを拒んだりするのは遺憾なことですわ。しかも過分なお望みでもありますまいに」(656)といながら、まるで「陽の光が雲にのるようにいと軽々と」そのひれ伏した体を踏み台にして馬車を降り、総督の差し出した手をうけて対面のあいさつをか

わす。その余りの誇り高い美しさに圧倒された群衆から、この時一斉に拍手が沸き起こった。この「不埒な」若者の正体について、随行者のイギリス軍大尉ラングフォード (Captain Langford) が、そこに居合わせた植民地の医師クラーク (Doctor Clarke) に問いかけると、もともとロンドン駐在の植民地代理官であった彼ジャーヴェイズ・ヘルワイズ (Jervase Helwyse) は、かの地でエリナ嬢を見初め恋したが、彼女の軽蔑的な拒絶にあって狂ってしまったということが明かされる。「そんな高望みをするこじたいが狂気の沙汰だ」と嘲笑する大尉に、植民地の民衆の有力な代弁者でもあるクラークは、「あれほど傲慢な足どりで官邸に入っていったあの令嬢に、いつか目に見える屈辱が降りかかるのでなければ、神の正義をうたがいたくなりますな。いつか、われわれに共通する人間性が、彼女といえどもそれに与る例外ではないことを主張する時がこないものかどうか静観しようではありませんか、それも彼女をもっとも卑しい者たちと同じ立場に貶めるようなかたちでね」と皮肉な返事をかえす。

数日後総督官邸では、彼女を歓迎する舞踏会が開催される。地位と富の特権に恵まれた紳士淑女が多数招かれ、その衣装のきらびやかさは絢爛の一語につきるものであった。主賓のエリナ嬢は、その美しさを誇示するかのように愛用のマント——以前からの噂によれば、それはロンドンのもっとも針仕事に熟練した婦人が死にぎわの謔妄状態で完成した刺繍作品で、彼女の魅力はそれを着けるたび不思議に際立つという——をまとして、舞踏の座興に加わりもせず、会場を眺めながら崇拜者の紳士たちと冗談めかした皮肉な会話に終始していた。しかし彼女の顔には、熱っぽい赤みと蒼白が交互にあらわれ、ときおり床に倒れんばかりの虚脱感に襲われているようすが、鋭い観察者にはみとれたであろう。やがて大きなダマスク織りの椅子に深々と身を沈めていた彼女に、その場の喧騒にまぎれてあの若者が近づくと、銀の酒杯を差し出ししながら、その杯の聖なる葡萄酒をすすり来賓たちに回すようにと懇願する。その行為が、彼女が人間としての共感の絆から離反しようとしてはいないことを示す象徴となるであり、さもなければ、彼女は墮落天使と同類になってしまう、というのだ。彼の切迫した訴えをあしらう彼女に、さらに若者は「手遅れにならぬうちに、その呪われたマントを火に投ずるように」(660)と絶叫するが、捕り押さえられ引きずり出されていく彼に、ただ彼女はたわむれの別れの言葉をかけるだけだった。「あなたの顔に別の相貌がやがてあらわれるとき、必ずや再会することになりますよ」というせりふが、彼の最後の警告であった。この間、

部屋の離れたところからじっとエリナ嬢を観察していた医師クラークは、なにか重大な兆候をみいだいたらしく、総督のもとへ歩みより、ふたことみこと耳打ちする。総督の上機嫌な顔は一瞬にして変化し、舞踏会は予定を繰り上げて閉幕となった。

舞踏会から数日後、ボストンに恐ろしい疫病が発生した。患者は、はじめのうち身分の高い富裕な特権階級の人々に限られていたが、やがて一般の民衆へ猛烈な勢いで広まっていった。その疫病とは、今日でこそ牙を抜かれた怪物となってしまったが、祖先の時代には何よりも恐れられた天然痘 (the Small-Pox) であった。感染を恐れて、患者を出した家には血の色の赤い旗がたてられ、犠牲者は遺品もろとも早々に墓に葬られた。しばらく前から総督官邸にも、この旗がたなびいていた。感染経路を追跡していくと、どうやら官邸が発生源であるらしい。さらには、あのエリナ嬢の部屋が、そしてさらには、エリナ嬢本人がまとっていたあのマントに、恐ろしい疫病が潜んでいたのにちがいない。そんな暗い噂が町に広まった。

ある日ジャーベイズ・ヘルワイズが再度官邸にあらわれ、赤い旗を引きおろすと、それを頭上に振りかざしながらなかに入っていく。「死神にしか会えはしないぞ」(663)と総督は警告するが、それを無視して彼は階段をかけあがっていく。さらに途中で、これまで医師として邸に詰めていたクラークが、彼を静止する。エリナ嬢を捜しているという若者に、医師は「空気を毒で充満させたのは彼女自身の息であり、あの呪われたマントから、彼女はこの地に疫病と死をまき散らしたのだ」(664)とその狂った想いをさまそうとするが、死神といあわせながら少しもその美貌が損なわれるはずのない、いやむしろこの世のものともおもわれぬほど益々輝きを増したエリナ嬢の美貌の幻影に憑かれた彼は、いささかも怯まず彼女の部屋に踏み込んでいった。しかし彼女の名を呼ぶ彼に答えたのは、天蓋の幕を閉ざしたままのベッドから「ああ喉が焼ける、一滴の水をなりと！」(665)というつぶやきの声であった。彼が幕を引く裂くと、その「毒にやられた顔」を隠そうとベッドの上で身をよじらせながら、「かってあなたが愛した女を、今はどうか見つめないでください」と懇願する女は、まさしくエリナ嬢そのひとであった。若者は狂ったように哄笑しながら、あのマントを掴むと官邸から飛び出していった。

その夜、たいまつをかざした行列が町をうねっていった。まんなかに見事な刺繍のマントを着せられた女の人形が担がれ、先頭には赤い旗を振って歩むジ

ャーベイズ・ヘルワイズの姿があった。総督官邸の前まできて、彼らがその人形を焼き払うと、風がその灰を巻き上げて飛ばした。その時から、疫病は衰えていったという。エリナ嬢のその後の運命は定かではないが、いまでも官邸の一室でマントに顔を隠した女の姿が時折おぼろに見えることがあるという。

.....

まず前二作からの時代設定の流れを確認しよう。1775年独立革命緒戦期の第一話から、第二話は1770年革命前夜の騒乱期へと五年の時間的遡行があった。第三話は、ボストンが植民地史上最悪の天然痘の流行にみまわれた1721年から翌年にかけての社会不安を背景にしていることは異論の余地がなく、時間は第二話からさらに五十年後退していることになる。問題とすべきは、70年代から半世紀を隔てたこの自然の災禍にまつわる社会不安に、ホーソンは、前二作の独立革命をめぐる文脈との連続性をどのように見いだし「総督官邸の伝説」に通底する歴史批評を担わせたかということである。

何よりもこの伝説に際立っているのは、天然痘の流行という事件に人間のプライド倨傲をめぐる罪と罰の普遍的寓話が託され、その寓意性があまりに圧倒的である分、前二作に比して歴史性が希薄であるかのように思われる点である。「彼女のこの特異な気質（残酷で頑固な誇り高さ）はほとんど偏執狂（monomania）というものであり、あるいは、もしそれによって影響をうけるもろもろの彼女の行動が正気の人間のものであったとするなら、神はそれほど罪深い誇り高さには必ずや厳しい報いを受けさせずにはおかないようにおもわれた」（654）と早々にその運命を語り手が予言するとおり、エリナ嬢の精神の歪みは、「肉体の病と精神の病とを神秘的に連関させるアレゴリー様式の慣習」⁽²⁾に従って、天然痘という病を介して肉体の醜悪として具現し、美貌の喪失という天罰を招く。彼女のプライドの形象であった圧倒的な美貌は、このとき文字どおり形を損なアイム・アイ・ガム・アドって、それまで維持されてきた物語秩序アイズ・アイ・ガム・レインの解体を引き起こすのである。精神を肉体に写しだす契機となる天然痘の発生と伝染を、もっともらしく現実味を帯びるよう劇化することにホーソンがさして腐心していない——物語の要所要所に医師クラークを立ち合わせるという首尾を除いて——点も、なるほどアレゴリーであれば読者を悩ませる怠慢とはいえないのだ。むしろクラークの存在こそ、肉体の病をいち早く察知しうる炯眼をもった科学者という役割以上に、全知の語り手の代弁者として神秘的な予知能力を発揮させられ、アレゴリー構造の先導役となっている。彼は、第一話「ハウの仮装舞踏会」のジョ

リフや第二話「エドワード・ランドルフの肖像画」のアリスのように、物語の「驚異の仕掛人」であるともいえよう。そして読者はアレゴリーの究極的なモラルを、「わたくしは神の呪いに打たれたのです。マントにくるまるようにプライドで身を固め、他の人々との人間的な共感を拒絶してきたわたくしが、今度は、この醜いからだを恐ろしい共感の媒体とされてしまいました。……わたくしは人間の本性に復讐されたのです (Nature is avenged)」(665) という彼女が若者に洩らす最後のつぶやきから、容易に回収するであろう。

しかし、エリナ嬢の倨傲を具体的なアクションとして引き出す役割を負うもうひとりの主要人物ジャーベイズ・ヘルワイズをこのアレゴリー解釈に位置づけようとするとき、われわれは何かしら釈然としない曖昧さをみいだすことになる。冒頭、官邸に到着した馬車から降りる彼女に踏み合がわりに身を投げ出す彼が、次の宴会の場面では彼女を破滅から救おうとする訓戒者となり、だが依然として彼女の美貌を偶像化しつづけている彼は、最後病室での衝撃的な対面を契機として、その夜の行進を先導し彼女の人形を焼き払うことで祓いの儀式を完了させる。結果として植民地の「救済者」となるのだ。こうしたエリナ嬢にたいする彼の行動の変節が、ただひとつの抽象概念の表象形態であるアレゴリーの構造から逸脱するものであることは明らかであろう。もちろんその行動の矛盾は、彼が「狂っている」からだといってしまうればそれで納得できるものであるかもしれない。しかし屈從的な崇拜者であった彼は、彼女の倨傲の単純な犠牲者ではなかったのであって、彼の最後の扇動的な行為を、犠牲者による正当な報復として天罰に整合させることには、なにかしら抵抗が感じられるはずである。つまり、それまでの盲信から覚醒するモメントを欠いたまま、災禍を祓う牙先を一途に他者へのみむけて突き進む彼は、「いったいいかなる資格において」植民地の「救済者」になりうるのか。それが「狂気」のなせる業であるとするなら、なにゆえ「狂気」が「救済」に帰結するのか。こうした問題意識において初めて、われわれはこの伝説を単純なアレゴリーには還元させない歴史性に出会うのである。

既に17世紀後半から、世代交代の進行とともに、英国からの「大いなる移住」^{グレート・マイグレーション}を果たした清教徒第一世代の宗教的情熱と彼らの生活を厳しく律していた禁欲主義は、弛緩しつつあった。たとえばよく知られている象徴的な出来事として、1662年に半途契約 (the Half-Way Covenant) が承認されたが、これは、幼児洗礼は受けているものの、かつては神との契約に入った絶対のあかしとさ

れた回心体験をもたぬ第二第三世代の子孫たちに、教会員と同等の資格を与えようとするもので、時代の趨勢として信仰心の衰退に対応せざるをえない聖職者たちの妥協策であった。新大陸に世界の範となるべき「丘の上の町」を築くことを使命とした第一世代には、信徒の集団が禁欲的な共同体としての秩序のもとに結束してあることが絶対の条件であったのに対し、「敬虔」が希薄化していく後続世代にとっては、個人の「自我」を称揚することがそうした共同体的な価値よりも優先するようになっていった。もちろんその背景には、貿易や土地投棄などによる商人勢力を中心とした植民地の経済的繁栄と、それにとまって自由主義的・合理的な信条が台頭してきたという事情がある。富裕階級のなかでは、とりわけ王政復古後、英国貴族の贅沢な趣味や流行へのあこがれ・模倣が強まり、既に確認したように⁽³⁾、伝説の舞台である総督官邸も、もとはロンドンの豪商 Peter Sargent 所有の私邸であったが、わざわざオランダから輸入された煉瓦を使って1679年に完成させたその優美な建物には、こうした時代趣味が反映していたであろう。そしてこの建物を官邸とすべく植民地政府が買い取った1716年に、初めての「国王の任命する総督」(Royal Governor)として館の主人となったのが、エリナ嬢の後見人として登場する Samuel Shute (1716—1723在職)である。

厳密に言えば、昨今のピューリタン研究で明らかのように、徹底した自我の否定によって全能なる神の(中世的な)宇宙における主権をたたえ、その超越的な導きにおのれの使命の実現をゆだねよと教えた第一世代の信仰のうちには、すでに近代的な個人主義の胚胎の兆候が(その厳しい監視にもかかわらず)あった。

新大陸に到達するや彼らは、(旧大陸の近代的な自我から)自分たちが避難しようとした企ては失敗したのではないかという思いに圧倒されはじめ、それは苦痛と雄弁な嘆きをともなって吐露された。自制能力のある個人 (self-governing individuals) としての彼らのアイデンティティが上昇していく萌しを目前にして、伝統的な社会の秩序と全能なる神への尊崇の念が後退していくのを感じとった時点で、彼らは近代人となったのだ。彼ら自身と彼らの同胞が本国で改造している社会の間に3,000マイルの隔たりをおいてもなお、自我の勝利に機先を制するすべはなかったのである⁽⁴⁾。

そしてこの「雄弁な嘆き」は、後続世代の聖職者たちの言説においていっそう支配的になっていく。不信仰がユダヤ王国の滅亡をもたらすと訴えた旧約の預言者になぞらえて、「エレミヤの嘆き」とよばれるこのレトリックは、むしろそうしたコンプレクスの潜在していた父親たちを、究極的な敬虔のモデルに還元し、父祖の信仰を絶対の地平へと権威づけ、それによって現在の「墮落」の深さを嘆き悔い改めよと救済を説く、プラグマティックな言説装置となっていたのである。第二第三世代の聖職者たちが語ったのは、「圧倒的に、父親たちが占めていた権威ある地位からの転落 (fall) の物語」⁽⁶⁾にほかならなかった。具体的な「墮落」の兆候は、たとえば土地の所有権争い、商売上の張り合い、地位への野心や嫉妬、華美な服装や流行への憧れといった「悪徳」の蔓延に見いだされたが、それらはすべて究極的な罪としての人間の「倨傲」から発しているものにほかならない。「倨傲」とは、父祖たちが築いた共同体の相互信頼の秩序を揺るがす増長した自我の別名であると。そして疫病やもろもろの自然の災禍も、人間の「墮落」に対する神の怒りすなわち天罰であると解され、ただひたすらな懺悔と断食によってしか浄罪・救済のみちはないとされたのである。たとえば歴代名だたる聖職者を輩出したボストンの名門 Mather 一族の二代目 Increase Mather (1639—1723) は、「1720年9月、さまざまな兆候を注意深く読み取って、(罪の蔓延した) このニューイングランドに(契約の神エホバによってたくわえられた災いの内でも最も恐ろしい) 天然痘が襲うよう準備されていると警告を発していた」⁽⁷⁾というが、実際1721年4月入港した英国船の乗組員の発病から、二月足らずのうちに天然痘はボストンの住民のあいだに広まり、患者およそ6,000人死者844人にのぼる植民地史上最悪の記録をつくって翌春にやっと終息をみたのである⁽⁷⁾。

「伝説」の歴史的文脈にもどれば、ヘルワイズがエリナ嬢の「倨傲」の無垢な犠牲者ではないように、すでに植民地の人々もそれに感応するほど十分に「墮落」していたというテキストの暗示を見逃してはならない。エリナ嬢が、望んで身を投げ出したヘルワイズを踏み台がわりにして馬車から降りる光景をみていた群衆は、「彼女の美貌にあまりにも感嘆し、誇り高さというものはそのような美しい存在にとってあまりにも本質的だとおもわれたので、彼らのなかから一斉に歓呼の拍手がわきおこった」(656) というのだから、彼らもまた「悪徳の町ロンドンを知った」(Helwyze [Hell-wise] の原義) 若者と、程度の差はあれ、同病であったというべきであろう。疫病が「通常の伝染経路とち

がって」(661) 上層階級の人々から下層へと蔓延していったこととわられているのも、病が律義に「倨傲」の度をなぞって彼らの罪を告発していったことの証左であるとおもわれる。先に言及した Mather 一族の三代目で Increase の子、Cotton Mather (1663—1728) は、その著書『アメリカにおけるキリストの偉大なる御業』のなかで、「忘却 (forgetfulness) こそが共同体が冒されている疫病 (plague) であり、ニューイングランドの市民たちは、父祖たちの聖なる遺産を継承するという義務の記憶を抑圧し、卑近な慰みを追い求め信仰の減退に貢献している」⁽⁶⁾と断じたが、「伝説」のなかのボストン市民たちの「忘却」ぶりは、自浄のための懺悔も断食も思い出さぬまま、自己の外に悪魔を名指すヒステリカルな叫びに転化していく。

人々はエリナ嬢への非難を狂人のようにわめきたてた。彼女の誇りと侮蔑が悪魔を呼び出し、二人の間に、この怪物のような悪（疫病）が生みおとされたのだと。ときとして、彼らの怒りと絶望は哄笑をともなった歓喜のようなものに転ずることもあった。疫病の赤い旗がひとつまたひとつと家々にひるがえっていくたびに、かれらは手を叩いて、通りに響きわたるような苦々しい嘲り声で叫ぶのだった。「そら、またエリナ嬢が勝利した」と。(603)

それに罹ることで「富める者をも貧しい者をも同胞 (brethren) であるという気持ちにかりたてずにはいない」(661) 疫病は、なるほどその無差別な感染力によって医師クラークが予言したとおり、エリナ嬢をその倨傲の高みからひきずりおろし「もっとも卑しい者たちと同じ立場に貶め」(656) たかもしれない。しかし Colacurcio が的確に指摘するように⁽⁷⁾、熱病によるこうした一時的な「^{レヴェリング}平等化」は、植民地の人々にヘルワイズのいう「人間としての共感の絆」を回復させるどころか、「同胞意識の完全な崩壊」に反転してしまうのだ。なぜなら、

人間にとって、生命に欠くことのできない天から与えられた空気を毒気でないかという疑いから呼吸できなくなってしまうたり、兄弟や友人の手を疫病の魔の手に捕まってしまうかもしれないという不安から握れなくなったりすることほど、忌まわしく非人間的な恐怖はない…… (662)

のだから。

このような相互信頼の消滅によって空洞化した共同体が、その内にある悪を抑圧したまま共通の敵（他者）を見だし、それを排除することで欺瞞的な連帯を回復するものであることは歴史の常識であるだろう。われわれを苦しめている疫病の源、それは大西洋を越えてやってきた高慢な女のマントにひそんでいたらしいという噂の病理——こうして植民地の人々は、彼ら自身の救済のために、その英国的なるものの象徴を粉砕すべき他者として再発見するのだ。彼らの内なる罪への抑圧は、集団狂気とでもいうべきサイキックなエネルギーをその他者にむけて暴力的に解放する。ヘルワイズの不気味な哄笑、真夜中の暗闇のなかから松明の火にあかあかと照らしだされる狂気じみた暴徒の行進、そして報復的な払いの儀式。総督 Thomas Hutchinson をモデルにしたともいわれる独立革命前夜の追放劇「ぼくの縁者モリヌー少佐」(“My Kinsman, Major Molineux”——「総督官邸の伝説」より早く1832年に発表されている)のクライマックスを思い出すのも、けっして的確はずれな連想ではあるまい。縁者モリヌー少佐の後見を当てにして田舎から出てきたものの、真夜中ボストンの町を彼の在所を探しめぐって迷ううち、まがまがしく松明をかざした行列に遭遇する青年ロビン。彼がそのなかに見いだしたものは、王党派のスケープゴートとしてタールを塗られ鳥の羽を突きされた屈辱的な縁者の姿であった——「笑いは伝染病のように群衆のあいだにひろがってゆきつつあったが、突然それはロビンをもとらえ、彼は通りに響きわたる大きな笑い声をあげた——だれもが腹をかかえ、だれもが肺がからっぽになるほどの笑い声をたてていたが、なかでもロビンの哄笑がひときわ大きかった」⁽¹⁰⁾。「縁者」を「他者」へと追いやる青年ロビンのヒステリックな笑いを、ホーソンは、植民地が祖国と絶縁するやがてきたるべき革命の本質として見いだしたのではなかったろうか。そしてその笑いは、歴史的な時間の隔たりを超えて、ヘルワイズが先導する夜の行進にも響きわたっていたにちがいない。

前作「エドワード・ランドルフの肖像画」において、総督ハッチソンの見抜いた清教徒の「悪魔の爪」は、もはや自浄のための祈りや断食が忘却されてしまった「危険な道徳的空隙」(dangerous moral vacuum)⁽¹¹⁾に、かくのごとき魔女(悪魔と交わって怪物【疫病】を生みおとす女)を捕らえたのである。疫病はふたたび50年後、アングロフォビアなる病となって植民地を革命の狂気へと駆り立てることになる。

IV

第四話「老嬢エステル・ダドリー」(“Old Esther Dudley”)の梗概は、以下の通りである。

イギリス軍のボストン撤退が必至となったある日、植民地総督を兼務する司令官ハウ卿 (Sir William Howe) は、既に召使を先立たせて虚ろになった官邸をなかなか立ち去りがたく、軍人として命を賭してこの地を死守することもなく退却せざるをえないおのれの運命をかえりみるにつけ、忸怩たる思いと憤怒とを繰り言のように独りごちていた。だが誰も居残っているはずのない邸内に、彼を励ますような「神の大義と国王の大義とはひとつ。さあ出立しなされハウ卿。国王陛下の総督を、神が勝利のうちに呼び戻してくださることを信じてな」(668)という女の震える声がかたまる。驚いた総督の前に姿をあらわしたのは、金色の柄の杖をついた老嬢エステル・ダドリー (Esther Dudley) であった。

彼女は没落名家の末裔で、はるか昔家を失って官邸に身寄せ、以来国王の庇護のもとで今日まで生きながらえてきたいわばこの邸の歴史の記憶の体現者であった。陛下からささやかな恩給をいただく（それはほとんど彼女の古風で壮麗な衣装代に使われるのだが）役割といっても、名目的なものにすぎず、ただ唯一彼女の官邸での実労といえるのは、深夜欠かさず皆の寝静まった邸内を火の始末を確かめるため回って歩くことだけだった。そんな毎夜のお勤めのせいも、彼女は伝説めいた存在となり、国王陛下より任ぜられた最初の総督のお供として官邸に入った彼女であるから、最後の総督が出ていくときまでそこに住まいつづける運命だ、などという噂がささやかれたりもしていたのである。

総督は彼女に、もはや国王への「忠誠を捨ててしまったこの地」(670)から今すぐに自分と一緒に出発して、ハリファクス (カナダ東岸の港町) で暮らすようにと説得するが、彼女は断固として官邸に居残る決意をくずさない——「長い間わたしを庇護してくれたこの館かさもなくば墓以外に、どこに老いたエステル・ダドリーの行き場がありませんや。ふたたび卿が凱旋されたあかつきには、おぼつかない足取りながらポーチに出てお出迎えいたしましょう。……ここにわたしは住み続けます。そうすれば、ジョージ国王には、忠節を翻したこの地にもなお、たった一人の忠義の臣民がお使えしていることにな

りましょうから」(669-670)。しばらくのやりとりの後その頑固さに辟易した総督は、ついに官邸の鍵を老嬢に渡すと、彼女の言葉にそれ以上逆らわず「いつか自分か他の陛下の総督が戻ってくるときまで、邸の管理を頼む」と言い残して、一人出発していった。

イギリス軍撤退後の政情の激変にもかかわらず、その後何年も、彼女が館の主人をもって任じ一人官邸に住み続けていることは、時の政権から黙認された。彼らとしても、この屋敷の管理にかかる雇い人の費用を節約できるという好都合もあったのだ。こうして黴臭い「古びた歴史的な建物」(671)に独居する老嬢の存在は、以前にも増して謎めいた伝説のタネとなり、たとえば、彼女はあそこに残っている古びた大きな鏡に、その昔官邸に出入りしたお偉方を写しだすことができるそうだといい作り話を町の人々は好んで口にした。彼らは今や「一徹な共和主義者」となっていたが、彼らにとって老嬢エスター・ダドリーは、哀れみの対象でありこそすれ、危害を加えて排除すべき敵ではなかった。

なるほど彼女は独りぐらしの老女ではあったが、孤独とはいえなかった。思い立てば、例の鏡からその昔仕えていた黒人の召使を呼び出して真夜中の墓地に遣わし、そこに眠っている名立たる王党派の面々を官邸に招待して交歓することもできた。また現実には、この「反逆者の町」(672)にいる王党派の残党を集めて、蜘蛛の巣のはった酒壺から葡萄酒を振る舞い、上気した彼らが「共和国に対して謀反を起こすぞ」などとうそぶくの聞いて楽しむこともできたのである。しかし誰よりも彼女が歓迎した客は、幼い子供たちであった。手作りのジンジャー・ブレッドに釣られて邸内に入った彼らは、彼女の話してくれる昔話にすっかり夢中で聞き入り、気がついてみると日もとっぷりと暮れて家路につくというありさまだった。しかも家では、まるでその昔官邸に縁のあったお歴々に実際会ったような口ぶりで話を伝えもしたので、子供たちの親はすっかり混乱させられた。

彼女は独立戦争の戦況を正しく把握しないどころか、そのニュースが官邸の門から入ってきて彼女の耳に届くと、どういふぐあいか、みなイギリス軍の武勲に変わってしまうようだった。彼女の確信は、時として心のなかで既成の事実さえも逆転させ、官邸に煌々と蠟燭を灯し国王のイニシャルの透かし模様を窓に浮き上がらせて、独り祝賀の宴に興じている老嬢の姿が、バルコニーに目撃されたりもするのであった。

国王の旗を先頭に進撃してくるはずのイギリス軍をいち早く確認しようと、官邸のてっぺんのドーム型の塔に昇ってはあたりを一望するのが、近頃の彼女の日課になっていた。そしてある日、それらしき情報が伝えられた。ついに念願がかなったのだ。鏡の前で入念に身仕度を済ませ邸内も隅々まで整えて、彼女は有頂天で足早に階段をおりていくと、中庭に飛び出した。威風堂々とした——どうやら風采から高貴で地位も高く権力者であるらしい——人物が、近づいてくる。それにしても彼とは不釣り合いなお供の者たちの粗末な格好など目にも入らず、彼女は彼が「長いこと待ちこがれた総督」(675)であることを確信して、その足元に跪くと官邸の鍵を差し出ししながら叫ぶ、「わたしの信頼のしるしをお受けください。この幸せな時を与えてくださった天に感謝します。国王万歳」と。すると相手からは、「このような時に、不思議な祈願を唱えられるものですか、マダム。……しかし、あなたの灰色の髪と長いこともちつづけられた信念に敬意を表して、誰もあなたにノーとは申しませんまい」(675-676)という意外な挨拶が返ってきて、彼女は愕然としてこの人物の顔をはっきりと見極めた。なんとこの男こそ、「国王のもっとも恐れ憎んだ敵、ニューイングランドの商人ハンコック (John Hancock)」であった。「国王に追放され、恩赦からも見離された」男が、今や人々によって選ばれたマサチューセッツ州の知事として官邸を引継ぎにきたのだ。彼の彼女に対する態度はあくまでも恩赦であったが、その口から発せられる演説の衝撃は大きかった。「あなたは長く生きていられたために、世の中はすっかり変わってしまったのです。……あなたは過去の象徴だが、我々は、もはや過去に生きるのではなく、現在に生きているともいえぬ、我々の命を未来に賭けている (projecting our lives into the future) 新しい人種の代表なのです。祖先からの迷信を我々の手本とするのではなく、前進また前進が我々の信念であり主義なのです (……it is our faith and principle to press onward and onward!)」という勇ましい演説にさらされながら、老嬢エステル・ダドリーは表玄関の柱のそばに崩れ、「わたしは死ぬまで忠実だった。国王万歳！」(677)とつぶやいて息をひきとる。その手から官邸の鍵が落ちて虚しく音をたてた。

.....

時代設定において第一話から第三話への流れは、次第に過去へ遡るものであったが、「総督官邸の伝説」の最後を締め括る第四話は、ふたたび第一話と同じイギリス軍のボストン撤退を背景とした物語（具体的には撤退時の1775年か

ら1779年に及んでいる)⁽¹²⁾となっている。また、ひとつひとつの「伝説」を囲む外枠の虚構(=著者である「私」が伝説を聞いている現在)にも、役割交代が生じていることを確認しておかねばならない。第三話まで話を聞かせてくれたティファニー氏(Mr. Bela Tiffany)に加わって、「王党派の老人」(the old royalist)と称される人物が最後の語り手となるのだが、既に第三話のフレームに酒場の客として登場していた彼の特異な存在はつぎのように描写されている。

彼は、王権とそれを後ろ盾にした植民地の政治体制や慣習に並々ならぬ愛着をもつ、あの今となってはほとんど絶滅したに等しい階級に属する人間の一人であり、これまで一度たりとも後の時代の民主主義とかいう異端(the democratic heresies of the after times)に屈伏したことはなかった。英国の若い女王(=ヴィクトリア)にとって、この老人ほどの忠臣は——おそらく彼ほどの敬意をもってその王座の前に跪く人間は、彼女の領国に二人とはいないであろう。彼の頭は、いまや共和国の穏やかな統治下ですっかり白くなってしまっていたが、そのほろ酔いかげんの口をついて出る文句では、この共和国の政権とて国泥棒(a usurpation)と呼ばれるありさまだった。(653)

そして第四話に前置きされたフレームでは、半世紀以上の時の隔たりを超えて、この老人の語り手が、王権への忠誠に殉じた「伝説」の女主人公にいかにか感情移入されて演じられたかが説明されている——彼は彼女の苦境をわがものとして、時には涙にくれ時には怒りに拳をふりあげ、また時にはその消耗ぶりによって自分の語っている話の脈絡を把握しそこねもしたと。「したがって」と、一連の伝説の聞き手であり書き手である「私」は続ける——「この王党派の老人の話は、大衆のおめがねにかなうように、これまでの(三つの)伝説よりもさらに修正をほどこす必要があった。そして語りの情感や格調も、わずかばかり、いやいく分か変更されたかもしれない。なぜなら読者に伝える媒介者の私は、徹底した民主黨員(a thorough-going democrat)であるのだから」(667-668)。このことわりが、「総督官邸の伝説」を連載する *Democratic Review* の編集者で戦闘的なナンショナリスト John L. O'Sullivan に対する Hawthorne の政治的配慮であったことは、既に述べた⁽¹³⁾。が、これまで分析してきたよ

うに一連の伝説は、表層的には O'Sullivan のようなナショナリスト・イデオログに歓迎されるストーリーを構築しつつ、それに対するディコンストラクティブな関心すなわち、独立革命をめぐる流通するレトリックが記憶と忘却のイデオロジカルな言説装置を通っていかように浮上してきたのかという関心を挑発する底脈もっていた。そうであるなら、あえて最後に語り手を交代させたこの「王党派の老人」による物語もまた、「徹底した民主黨員」である「私」によって施された修正にもかかわらず、はたしてこれまでの伝説に通底してきたディコンストラクティブな関心につらなる何かを示唆するのであろうか。

さて物語は、第一話において自分の主催する仮装舞踏会で最後の植民地総督として官邸を出ていく 遺恨の姿を予告されたハウ将軍 (General William Howe) が、今現実にはひとり退去を余儀なくされている場面から始まっている。しかしこのハウは、慢心によって状況に対する洞察を欠きアイロニーの格好の犠牲者となっていた先の彼とは違って、もはや圧倒的な歴史の変化に抵抗しえぬことを正しく認識する軍人として、この地の王権を死守できない不名誉を吐露し、読者の共感をさそう素顔をさらしている。

……彼は握り拳で自分の額を打ちながら、解体してしまった帝国の恥辱を我が身に負わねばならぬその運命を呪った。

「ああ神よ願わくば」と、怒りの涙をほとんどこらえきれずに彼は叫んだ。「今にも反乱分子どもが入り口に迫り来たらんことを。そうなれば、床に落ちた一滴の血痕が、イギリスの最後の統治者はその重責に忠実であったとあかしてくれようものを」(668)

だが彼がもっとも不名誉に感じている政権の断絶は、植民地における王威の存続を確信する老嬢の突然の出現によって、「ひとまず」先送りされる問題となるかのように思われる。ストーリーのレベルでは、彼女はハウから預かった官邸の鍵を首尾よく次の総督に渡すことができるのか、つまり彼女は総督の空位を生き延びて、「ひとまず」の断絶がほんとうに継承に転換される時に立ち合うことができるのかどうか、読者の興味を誘導していくのだ。しかし現実的な状況判断によって撤退を不可避と認識するハウが、いったん彼女にたいして真剣に「どうしてあなたは(王権の失墜したこの地に居残り)そのような変化

に耐えていけるのか」(670)と問いかけはしたものの、ついには「人間の姿をした旧弊な偏見そのもの」(the very moral of old-fashioned prejudice [670])としてこの年老いた同志をいち早く見限ってしまう独白に暗示されるように、彼女のその後の生は、この問いをむしろ回避するかたちで生きられていく。つまり、彼女は変化に耐えて生き延びるのではなく、現実から撤退してその存在と不可分である官邸に隠遁しつづけ、歴史の圧倒的な変化と断絶することによって、かろうじて「たった一人の忠義の臣民」という存在証明を維持しつづけていくにすぎない。

したがって最後の運命の時にいたるまでの彼女の折々の行動を伝えるエピソードは、その断固たる決意とはうらはらに、アナクロニスティックな疎外の風景そのものであり、哀切とすらよびうる情感をたたえたものとなっていく。そもそも彼女が「侵入者（新政権のもとで活動するものはすべて彼女は侵入者とみなしたのだが）に対してすさまじい傲然とした剣幕で」(671)応酬し、次の総督の到着まで断固ひとりで守りぬくことを重大な責務と考えている官邸は、ボストンの町の人々にとっては、今や完全に「崩れた誇りと転覆された権力の館、その歴史を彼女に体现させた旧体制の象徴」にすぎぬ古ぼけた黴臭い建物になっている。そして彼女の「守っている」という自負もまた誤った思い込みであって、その実は、時の政権によって管理費節約という経済的な配慮から残留を黙認されていたにすぎない。世の中は、「しまり屋のヤンキー・エコノミクス」⁽⁴⁾が支配する時代となっていたのである。さらに皮肉なことに、彼女の現実からの撤退は、彼女の内に「植民地は早晩国王の足元に平伏す」(673)という無敵の確信をますます強めていくのだが、当然の徴候というべきかついには現実の戦況でさえ好都合に歪曲し納得してしまうユーフォリアを発症させることになる。しかし、たとえば官邸に煌々とお祝いのイルミネーションが灯される時、人々は驚かされ彼女の迷妄ぶりを笑いこそすれ、そこに浮き出た国王のしるしの透かし模様を泥を投げつけるような、よくある報復はしなかった——なぜなら結局彼らは、「彼女が属している体制の今やすっかり崩れた残骸のなかに、あれほど陰鬱なすがたで勝ち誇っている老女」(674)の姿を見いだしたとき、哀れをしか感じなかったからである。

したがって、この最後の「伝説」には、先行する三つの伝説にあるような緊張した敵対関係といったものは見いだせない。彼女は、すでに確立しつつある共和国の新体制に対して、初めから圧倒的に無力で政治的な転覆の機会を誘導

する人物ではとうていありえないし、人々の彼女に対する主たる感情も、哀れみであって脅威ではない。それゆえ彼女がハンコックに対面しこれまでの期待が一転して失望に変わるアンチックライマックスは、いわば危うく守られていた過去の記憶の皮膜を突き破って、突如現在が、いや未来が奔流のように侵入してくる彼女にとっては残酷な場面だが、それは、はじめから不可避な顛末として運命づけられていたというべきであろう。一人官邸を出ていくハウをエスターが見送る最初の場面に「もし希望が彼女のまわりをはばたいているように思われたとしても、それは変装した記憶でしかなかった」(.....if Hope ever seemed to flit around her, still it was Memory in disguise [670]) という洞察が付されていたが、最後の場面は結局のところこの洞察が現実に演じられたにすぎない。ジョン・ハンコック、独立宣言への署名が肉太の字体で際立っていたことからその名が「署名」を意味する普通名詞となっている成金商人、Simon Bradstreet 以来市民の選挙によって選ばれた初めての知事であったという事実や莫大な資産ゆえにキングともあだ名されたという派手な風采、彼はまさに、エスターの幻想に際どく接近しながら最後に粉砕するという役割にふさわしい独立革命の表象であった。そして彼が演説で強調する「過去との断絶・未来への前進」とは、独立革命のイデオロギー(=自由)を構成する言説にはかならず、さらに19世紀のナショナリズムに反復されたレトリックでもあったことはいままでもない⁽¹⁵⁾。王権支配からの脱却が旧体制のもろもろの抑圧・束縛から自由になることであるならば、アメリカの独立とは、究極的に過去そのものとの断絶であり、19世紀ナショナリズムの標語「明白なる天命」は、それによって生じた文化的疎外・根無し草的なアイデンティティをアメリカ国家の「必然的な命題」として喧伝するプロパガンダにはかならなかった。

独立革命から19世紀ナショナリズムへ継承されたこのような未来への確信に、エスターの負った「過去の記憶」は、なすすべもなく葬りさらされてしまうしかなかったのか。言い換えるなら、この最後の「伝説」は、「王党派の老人」の語りに対する「徹底した民主黨員」である「私」の修正が、O'Sullivan の理念にひたすら忠実に実践されたというあかしでしかなかったのか。

「我々はもはや過去の子供ではない！」(“We are no longer children of the Past” [677]) というこの「伝説」を閉じるハンコックの宣言は、しかし、必ずしもテキスト全体が収斂する透明な声となることを許されてはいないように思われる。なぜならこの宣言は読者に、政治的にはまったく無力であった

エスターが、彼女のもとに集まった子供たちを一時的にせよ「過去の子供」に変貌させる別の力をもっていたことを思い出させるからである。

こうして幼い少年たちや少女たちが暗い謎めいた館から再びこっそりと出てきたとき、謹厳な大人たちがとうの昔に忘れてしまった懐かしい感情で満たされていた彼らは、すっかり当惑していた。大昔の時代に迷いこんで過去の子供になってしまったかのように、彼らは目をこすって自分たちのまわりの世界をあらためて見回すのだった。家に帰ると……既に亡くなった植民地のお偉方の話に夢中になり……まるで彼らの膝のうえにのってその贅沢なチョッキの刺繍をいじったり、壁の長く垂れた巻き毛を乱暴に引っ張ったりしてきたかのような口振りであった。「でもベルチャー総督は何年も前に亡くなったはずだけれど」と母親は息子にいう。「ほんとうにおまえは官邸で総督にあったのかい。」「そのとおりでよ、母さん。そうともさ」と、なかば夢みているように子供はこたえる。……こうして、その幼い客たちを少しも怯えさせることもなく、彼女は彼らの手をひいて自分の佻しい心の部屋へ導き入れ、彼らの想像力に訴えてそこに住みついている亡霊たちを見いださせたのだった。(673) (下線筆者)

多くの批評家が気づいているように、エスターはここで、後に Hawthorne が「ノヴェル」に対立する小説作法として唱えることになる「ロマンス」的な語りを実践している⁽¹⁶⁾。「現実的なものと想像的なものが出会う中間地帯」——「このような場所へなら、われわれを怯えさせることなく亡霊たちが入ってこられるかもしれない」と、彼は有名な「税関」の一節で「ロマンス」の理想的なシーンをイメージ化してみせるのだが、同じようにこの場面でも、エスターによって、現実世界の子供たちは今やいわば異次元の時空間となりはてた総督官邸に招き入れられ、一時的にせよ過去と共生しえたのだ。「古ぼけた鏡」に記憶に生きている過去の人々を写しだしては孤独を慰めるというナルシズムにとどまらず、彼女がコトバを介して子供たちに語る時、外の世界で封印されていた記憶は攪拌され大人たちの「忘却」すらゆらぎをみせる。Newberryはこのエピソードの含意について、「彼女が子供たちに提供したのは、彼らの教育から排除された過去のヴァージョンであり、それはホーソンが『総督官邸の伝説』を、彼自身の時代のデモクラティックに正当化された歴史記述から削

除された歴史批評として提供していることと重複する」⁽¹⁷⁾と評しているが、裏を返せば、独立革命に起因する過去の捨象・未来への確信は、後統世代へ絶大な教育効果を及ぼしてもいったのだ。

Donald Pease は、その著書 *Visonary Compact* において、独立革命から継承されたこうしたパラダイムが、19世紀の南北戦争前の時代には、「否定的自由（＝抑圧的と感じる一切のものからの逃走すること）の氾濫」（a surplus of negative freedom）⁽¹⁸⁾を招き社会的なコンテクストを空洞化するという事態をもたらしたと指摘する。そして、そうした事態を、有効なものとしてよりは脅威的なものとして洞察しえた作家たちのなかから、とりわけ Hawthorne が「独立革命前の過去」（a pre-revolutionary past）を発見するにいたった認識の前提を、つぎのように論じている。

「進歩」（progress）というミュトス——それはじつのところ、独立革命のミュトスのヴァリエーションであったのだが——のおかげで、ある者たちにとって、「変化」（“change”）は成長と読み代え可能な概念となった。しかしいったいそれは何からの変化なのかを明確に把握できないかぎり、誰もその成長のゆくえを知りえない——ただ進歩の一般的な効果として、新しいもの（the new）が生まれるということにはわかるにしても。

進歩と退行（obsolescence）とは、相互に作用する交換可能な用語となり、その二つが一緒になって変化が生みだされた。しかし、それに歴史の感覚がともなわなければ、生産された変化は成長を欠いてしまうのだ。成長のためには、文化的な過去に対する洗練された感覚（a refined sense of the cultural past）が必要であったが、進歩を唱える独立革命のイデオロギーが共和国の人々に捨象するよう教えこんでいたものは、まさにその感覚に他ならなかった⁽¹⁹⁾。

もちろん、エスターが施した共和国の子供たちへの教育効果は、歴史批評と呼べるほどのものとはなりえていない。しかし君主への絶対的な忠節において語られる彼女の記憶は、その封建的なアウラの振起において、ハンソックの演説にあるようなパラノイックな「進歩」への過信がうみだす近代的な空洞を、逆に照射するであろう。そのとき、「未来へ投影される自己同一性」という共和国の「必然的な命題」もまた、その「起源」において何が切り捨てられたのか

を問い直されるはずである。

《注》

- (1) テキストは, *Nathaniel Hawthorne: Tales and Sketches* (The Library of America, 1982) を使用し, () 内の数字は頁を表す。以下引用部分は、すべてこの版による。
- (2) John E. Becker, *Hawthorne's Historical Allegory: An Examination of the American Conscience* (Port Washinton: Kennikat Press, 1971), p. 53.
- (3) 拙論『『総督官邸の伝説』試論——独立革命をめぐるレトリックについて(前)』『法政大学教養部紀要(外国語・外国文学編)』(81号, 1992年), p. 72 参照。
- (4) Andrew Delbanco, *The Puritan Ordeal* (Cambridge: Harvard: Harvard U.P., 1989), p. 224.
- (5) *ibid.*, p. 225.
- (6) Michael J. Colacurcio, *The Province of Piety: Nathaniel Hawthorne's Early Tales* (Cambridge: Harvard U.P., 1989), p. 427. なお, Colacurcio は, この Increase Mather の警告を, Perry Miller の *New England Mind: From Colony to Province* (Cambridge: Harvard U.P., 1953), p. 346 から引用している。
- (7) Ola Elizabeth Winslow, *A Destroying Angel: The Conquest of Small Pox in Colonial Boston* (Boston: Houghton Mifflin, 1974), pp. 44-58.
本書はタイトルの通り, 植民地時代のボストンにおける天然痘発生の歴史を検証した事例研究である。扱われているテーマとして特に興味深いのは, 疫病に対する当時の宗教面・医療面の対応で, とりわけ植民地においては前代未聞であった接種(inneculation)の実験が挙げられる。当時は十分な隔離体制も確立しておらず, 19世紀末に Edward Jenner が牛痘による種痘法を完成する以前の, 技術的には素朴で危険な人痘による実験であったため, その是非をめぐって激しい論争が沸き起り, ボストンはヒステリックな社会不安に陥った。接種推進派の有力者 Cotton Mather が, 爆弾テロにあったというエピソードは有名である。なお, 「伝説」に登場する医師クラークのモデルであろうと彼女が推定している実在の John Clark (1598-1664) については, 同書 30-31 頁に言及がある。一方, Colacurcio も, この一大事件に注目し何故敢えて Hawthorne が「伝説」からこの問題を排除したか(“Hawthorne's fantastic omission”)という点を彼の政治的意図とからめて洞察している。ただし医師クラークのモデルについては, 彼は別の人物の可能性を挙げている。Colacurcio, *op. cit.*, pp. 424-448 および p. 639, note 26 参照。
- (8) Mitchell Robert Breitwieser, *Cotton Mather and Benjamin Franklin: The price of representative personality* (Cambridge: Cambridge U.P., 1984), p. 123.
- (9) Colacurcio, *op. cit.*, p. 439.
- (10) テキストは, *Nathaniel Hawthorne: Tales and Sketches* (The Library of America, 1982), p. 86.

- (11) Colacurcio, *op. cit.*, p. 445.
- (12) Robert E. Fossum, "Time and Artist in 'Legends of the Province House,'" NCF, 21 (1967), p. 346.
- (13) 拙論『総督官邸の伝説』試論——独立革命をめぐるレトリックについて(前)』『法政大学教養部紀要(外国語・外国文学編)』(81号, 1992年), p. 74 参照。
- (14) Frederick Newberry, *Hawthorne's Devided Loyalties: England and America in His Works* (Rutherford: Fairleigh Dicknson U.P., 1987), p. 104.
- (15) Doubleday は、O'Sullivan が *Democratic Review* 誌への 'introduction' として書いた文章の一節を引用し、ハンコックの演説との近親性を指摘している。Neal Frank Doubleday, *Nathaniel Hawthorne's Early Tales, A Critical Study* (Durham: Duke U.P., 1972), pp. 132-133. さらに Colacurcio は、O'Sullivan だけでなく、Hawthorne の 政治的人脈の有力者であった歴史家の George Bankroft を、その強力な民主主義的歴史観において、ハンコックの演説のイデオロジカルな系譜につながる者とみている。Colacurcio, *op. cit.*, pp. 449-482.
- (16) 例えば、Newberry, *op. cit.*, p. 105. Bell と Colacurcio は、それぞれに、ハンコックとエスターの対立が、後の長編『七破風の屋敷』(1851) のモール対ピンチョンの対立に引き継がれているという同様の指摘を行なっている。Michael Davitt Bell, *Hawthorne and the Historical Romance of New England* (Princeton: Princeton U.P., 1971), p. 207. Colacurcio, *op. cit.*, p. 457.
- (17) Newberry, *op. cit.*, p. 105.
- (18) Donald E. Pease., *Visonary Compact: American Renaissance Writings in Cultural Context* (Madison: University of Wisconsin Press, 1987), p. 10.
- (19) *ibid.*, p. 53.